ロス・ゼンマウンテンの法戦式

少水、常に流れて石を穿つ

平成元年を迎えてはじめてお届けする本誌ですが、通巻第十二号となりました。思えば六年前の秋、当寺開創十五周年を記念して創刊して以来、今日に至ったわけであります。

これは檀信徒の皆様方の絶大なる御協力により海外で留学生活を続ける僧たちよりの原稿によるものも大きいと考えます。

過日、第五回の留学僧に対する辞令交付式をおこないましたが、いまや派遣者数は二十二名、派遣国は九ヶ国に達しております。そしてインド留学僧の安井隆同師がこのほどカルカッタ大学より博士号を授与されました。皆様に御報告申し上げるとともにこの栄誉をはげみとして留学僧の派遣育英事業にさらに一層の精進をと心に誓っております。

釈尊は最後の教誡（きょうかい）『遺教経（ゆいきょうぎょう）』において、出家修行者の積極的な生き方として八大人覚（はちだいにんがく）、つまり大人（だいにん）・大丈夫（だいじょうぶ）の修すべき八種の法門

を説いておりますが、第四番目の「精進」につき、次のように述べております。

汝等比丘、若し勤めて精進すれば、則事として難き者なし。是の故に汝等当に勤めて精進すべし。譬えば少水の常に流れて、則ち能く石を穿つが如し、若し行者の心数々懈廃すれば、譬へば火を鑽るに未だ熱からずして而も息めば、火を得んと欲すと雖も、火を得べきこと難きが如し。是を精進と名づく、と。

現代風にいうと、何事も一心不乱に努力すれば成就しないものはない。たとえばせせらぎのような流水であっても、常に流れておれば石に穴をあけるように。また途中で修行を中断したりすると悟りの道はますます遠のいてしまう。木をこすって火を得ようとするとき、途中でやめてしまったら、遂に火を得ることができないように、というのであります。

このみ教えは釈尊の教えを奉ずる者すべてに与えられたものとして受け止め、少水の常に流れて石を穿つ微力の相続を念じております。

上：法戦式に向かう随喜衆（先頭・方丈と佐藤老師）

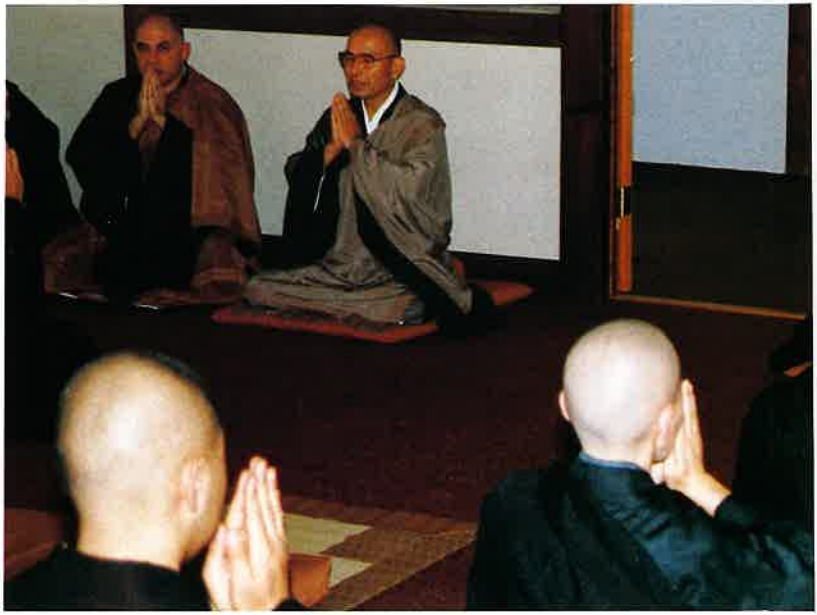
左上：本則行茶　礼拝するのはウェンディ恵玉首座

左下：法戦式で問答をかける同僚

▲
◀禅堂での法要

法要に参列する安居者

詳細は本文に



森の中の昼食会

上・方丈と佐藤老師の上殿を告げる殿鏡

左・方丈と佐藤老師を見送るメンバー

ゼン・マウンテンセンター・オブ・ニューヨーク